

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520458

研究課題名(和文) 自然談話データに基づくオハイアット・ヌートカ語の文法記述および辞書の作成

研究課題名(英文) Grammatical Description and Glossary based on Natural Discourse Data of Huu-ay-aht, a Nuu-chah-nulth Language

研究代表者

中山 久美子 (Nakayama, Kumiko)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：40401426

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、消滅の危機に瀕し研究も未開発であるオハイアット・ヌートカ語(カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州)において、のべ3か月の現地調査を通じて、自然な言語使用データの分析にもとづいた文法研究および文法記述を行った。同時に、自然談話データから得られた用例を数多く盛り込んだ語彙集の編纂をすすめ、オンラインでの利用を目的とした環境整備を行った。

研究成果の概要(英文)：In this study, fieldwork has been conducted on Huu-ay-aht, an endangered and understudied Nuu-chah-nulth language, in the province of British Columbia, Canada, for the total period of three months. Based on the obtained naturally occurring discourse data, grammatical patterns of the language have been analyzed and described. At the same time, a glossary with extensive examples out of the discourse data is compiled, and the computational infrastructure has been prepared for online delivery of the lexical database.

研究分野：人文学・言語学

キーワード：危機・少数言語

1. 研究開始当初の背景

(1) オハイアット・ヌートカ語は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州南西部バンクーバー島西岸地域で話されている少数言語で、話者数は数十人ほどの高齢者に限られるという、典型的な「危機言語」である。

(2) 研究代表者と研究分担者は、本研究前に20年近くにわたって、ヌートカ語の調査および研究を進めてきた。アハウザット方言に関する現地調査を中心としてヌートカ語研究の基礎固めをし、著名な言語学者エドワード＝サピアによって収集されたデータを基にツィンシャート方言へと研究を広げ、さらにそれまで組織的な調査・研究がほとんど行われてこなかったオハイアット方言のコーパスデータの蓄積に努めてきた。

(3) ヌートカ語は、複統合性や品詞分類の不明瞭さなど、ヨーロッパやアジアの諸言語とは非常に異なる興味深い構造的特徴を持ち、その研究は単に個別言語の記述を越えた一般言語学的な意義を持つ。本研究において、これまでに蓄積されたオハイアット方言の言語データを有効に生かし、その分析・記述を進めることは、ヌートカ語諸方言の包括的記録・研究を行う上で重要なステップであると考えられる。

(4) 研究分担者がビクトリア大学(カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州)の Berry Carlson 氏より譲り受けた1970年代のデータに加え、平成21年度～23年度基盤研究(C)「オハイアット・ヌートカ語のドキュメンテーション研究およびコーパス構築」の成果である自然談話データベースの拡充により、オハイアット方言における言語運用に基盤をおいた文法研究を進めるための環境が整備されてきた。

(5) 近年、オハイアットのコミュニティでは伝統言語の再活性化への関心が高まり、伝統言語の記録・伝承のための活動が盛んになっている。特に2012年度より現地のコミュニティカレッジにおいて伝統言語の指導者養成講座が開講され、コミュニティのメンバーから文法・語彙の総括的な資料編纂への強い要望・期待が示されている。北米先住民諸語の調査・研究は社会的・政治的困難を伴うのが常であるため、このようにコミュニティ側から言語の記録・再活性化活動への協力・貢献への期待が寄せられる状況はまれに見る好機である。

(6) 研究代表者と研究分担者は、人間言語に観察される文法現象・パターンに関して、そうした規則性が形成され、維持され、また変化していくメカニズムを解明することを研究の大きな柱としている。近年、機能主義的言語学を中心とする研究潮流の中で明らかにされてき

ているように、文法パターンの形成・変化を方向付けているのは、実際の言語運用のあり方とそれを形作る認知的・社会的要因や語用論的要因などであると考えられる。つまり、文法パターンがどのように形成され、変化していくのかという人間言語の構造に関してより本質的な疑問に答えるためには、様々な言語について、自然な談話での言語の使われ方の実際を詳しく精査することが不可欠なのである。

2. 研究の目的

(1) オハイアット・ヌートカ語のデータベースの拡充:

現地調査を通して、文法記述および語彙集編纂に必要な語彙資料やテキスト資料を収集し、既存の言語資料データベースの内容をより拡充させる。

(2) オハイアット・ヌートカ語の文法の記述:

(1)の言語データベースを活用し、実際の言語使用における言語の使われ方の実際を、言語コミュニケーションを取り巻く文化的・社会的背景も含め総合的に精査し、その文法パターンを記述する。ヌートカ語の特徴である、複統合性、品詞分類など、類型的に稀有な構造を中心に、必要に応じて現地調査において母語話者の協力を仰ぎながら、オハイアット・ヌートカ語の総括的な文法記述の集大成化を目指す。

(3) オハイアット・ヌートカ語語彙集の作成:

(1)の言語データベースを基に、民族誌的な内容も含んだオハイアット・ヌートカ語の語彙集の編纂を進める。言語再活性化に向けた現地コミュニティでの活動への活用などの実用性を鑑み、実際の自然談話における使用例を多く盛り込みインターネットでの公開を目指す。

(4) 現地コミュニティへの言語教育支援:

(2)、(3)で纏めた文法記述・語彙集を基に、オハイアット・ヌートカ語コミュニティでの伝統言語記録・再活性化活動に対する言語教育支援(言語教育のための資料提供、文法教育のためのアドバイスなど)を行う。

3. 研究の方法

(1) 現地調査:

研究期間の毎年度夏季に約1カ月の現地調査を行う。調査は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州、バンクーバー島のポートアルバーニ及びバンフィールドにて行う。現地調査においては、複数の母語話者と面談を行い、録音・デジタル化された音声資料を聞いてもらい、その書き起こしおよび翻訳に協力を得る。同時に、新たな語彙の収集・録音、テキストデータ(物語や会話などの自然発話)の収集・録音・録画、さらに、文化・社会的背景を調査・記録するためのインタビューを行う。

(2) データの保存：

現地調査で収集される音声・映像データは、コンピュータに取り込み、データ保存のために、順次光学メディア（CD、DVD）に焼きこみ、保管する。

(3) 文法分析：

現地調査で得られたデータ資料はソフトウェアツール（SIL Toolbox など）を活用しながら処理・分析を行い、そこで明らかになる文法パターンを項目ごとに記述していく。

(4) 語彙データベースの構築：

既存の言語データベースおよび新たに得られる語彙・テキストデータに出現する語彙をもとに語彙データベースを構築する。同時に語彙集のフォーマットを策定し、自然談話における用例とリンクさせ、音声・画像データとも関連付けた形でオンラインにて利用できる環境を整える。

4. 研究成果

(1) 研究初年度の35日間（7月24日～8月27日）、第2年度目の29日間（7月30日～8月27日）、および第3年度目の25日間（7月30日～8月23日）にわたり、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州ポートアルバーニを中心として、現地調査を行った。

現地では、母語話者との面談・インタビューを行った。面談では、すでに録音されているオハイアット・ヌートカ語の音声データの聞き取り、書き起こし、翻訳への協力を得た。同時に、関連する語彙や言語表現、談話などの新たなデータ収集も行った。これらのデータは、すべてICレコーダー、また状況が許す限りビデオによって記録した。

23年度より現地コミュニティーカレッジにおいて開講されている伝統言語の指導者養成講座担当者との打ち合わせを行った。言語教育教材の閲覧、および言語データの保存作業やその有効な活用方法に関して協議を重ねるとともに、引き続いての支援体制を確認した。

(2) これまでの文法記述研究は概してコミュニケーションコンテキストと切り離された文法パターンだけに焦点があてられてきた。本研究では、ヌートカ語という西欧諸言語とは典型的に非常に異なる言語について、言語運用に基盤をおいた文法研究という新しい方向性を示すとともに、言語運用に基盤をおいた文法研究そのものを西欧諸言語の枠から外れた新しい方向に発展させる契機となったと思われる。

(3) さらに、実際の言語使用にもとづいたデータ・文法分析に基づいた語彙集を整備することによって、学術コミュニティーに対してのみならず、消滅の危機に瀕している伝統言

語の再活性化活動をめざす現地コミュニティーをも含めた広い範囲での研究・活動に活用される知的資源の蓄積という大きな成果を上げることができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

Toshihide Nakayama, “Polysynthesis in Nuuchahnulth, a Wakashan language.” In: Michael Fortescue, Marianne Mithun, and Nicholas Evans (eds.), Handbook of Polysynthesis. Oxford University Press. 査読有、1巻、印刷中

中山俊秀, 「負ける体験としてのフィールドワーク」西井涼子編『人はみなフィールドワーカーである：人文学のフィールドワークのすすめ』東京外国語大学出版会。査読無、1巻、2014、pp36-55

Toshihide Nakayama, “Nuuchahnulth (Nootka).” In: Genetti, Carol, How Languages Work, Cambridge, Cambridge University Press. 査読有、1巻、2014、pp441-462

〔学会発表〕（計 14 件）

Toshihide Nakayama and Kumiko Nakayama, “Toward an Organic View of Unit”, Helsinki Symposium on Matches and Mismatches of Units in Interaction, 2014.9.11-12, University of Helsinki

Toshihide Nakayama, “An exploration of grammatical tightness: some observations from Nuuchahnulth narrative data”, International Workshop on Tight and Loose Grammar, 2014.11.29-30, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

中山俊秀, 「危機言語時代の言語調査なにをどのように記録すべきか」（招待講演）国立国語研究所 時空間変異研究系 合同研究発表会、2014.3.21、国立国語研究所

Toshihide Nakayama, “The role of polysynthesis in Nuuchahnulth morphosyntactic structure”, International Symposium on Polysynthesis in the World’s Languages, 2014.2.20、国立国語研究所

Toshihide Nakayama and Tsuyoshi Ono, “Toward Understanding Grammar through Conversation”, Annual Meeting of the Linguistic Society of America, Tutorial: Documenting Conversation, 2014.1.2、Linguistic Society of America, Minneapolis, MN, USA

Toshihide Nakayama, “Problems of ‘units’ in describing Nuuchahnulth

syntax”、International Workshop on Linguistic and Interactional Units in Everyday Speech: Cross-Linguistic Perspective、2013.6.21、University of Alberta

中山俊秀、「テキストを使った方言研究から見えてくること 危機方言の調査と記述」日本語学会春季大会・ワークショップ『自然談話が切り拓く方言研究 自然談話を基盤とすることにより文法研究をどのように発展させられるか』2013.6.1、大阪大学

中山俊秀、「生きている言語を捉える挑戦：言語研究のパラダイム転換に向けて」国立大学共同利用・共同研究拠点協議会第9回知の拠点セミナー、2012.6.14、京都大学東京オフィス

〔図書〕(計 2 件)

Toshihide Nakayama and Keren Rice、
The Art and Practice of Grammar Writing、Language Documentation and Conservation Special Publication 8、University of Hawai'i Press、2014、157pp、pp.1-5

6. 研究組織

(1)研究代表者

中山 久美子 (Nakayama Kumiko)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員
研究者番号：40401426

(2)研究分担者

中山 俊秀 (Nakayama Toshihide)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：70334448